

この報告書における記述の枠組み

小西いずみ

1. はじめに

この報告書は、先に刊行した『全国方言文法辞典資料集 (2) 活用体系』(以下『活用体系』とする) および『全国方言文法辞典資料集 (3) 活用体系 (2)』(『活用体系 (2)』) に続くものである。ただし、特に動詞の活用の記述に関して『活用体系』と『活用体系 (2)』の間に方針の変更があり、本報告書は後者の方針を踏襲している。以下では、本報告書の記述方針を、『活用体系 (2)』の内容に誤字修正などの表現上の修正を加え、改めて示す。

この報告書の目的は、動詞等の活用における日本語諸方言のバリエーションと、それを記述するための枠組みを提示すること、および、それにもとづいて諸方言の活用体系を分かりやすく記述して示すことである。記述の枠組みについては、この活用編だけでなく、『全国方言文法辞典』全体に適用しうる語・形態素の認定基準やそれらの分類法を目指している。『全国方言文法辞典』である以上、方言間の文法の差異を超えて適用しうる枠組み、言わば、通方言的な記述法を用意する必要があり、この点で、特定の方言の共時的な参照文法を編むのとは異なる。また、『全国方言文法辞典』の読者・使用者には、方言・言語の研究者だけでなく、広く方言に関心のある人が想定ないし期待される。そのため、高度に専門的な言語学・日本語学の知識を要せずとも理解・使用できるような記述法を目指す。

2. 「活用」と「活用形」

「活用」は、狭義には「単語が統語的機能や文法的意味に応じて形を変えること」などと定義できるが、ここでは、形の変化の単位を「単語」ではなく「述語」に拡大する。「活用」と「活用形」は次のように規定できる¹。

活用 述語が統語的機能や文法的意味に応じて形を変えること。語彙の意味を担う単語それ自体が語形変化をする場合のほか、単語に他の語(付属語や補助用言)が接続する場合を含む。

活用形 一つの語彙的意味と、一つ以上の文法的意味を表し、自立する形。

なお、「語(単語)」の種類として、「名詞」「動詞」等の品詞分類の上位に、次の区別を置く。

自立語 単独で自立しうる最小の形式。名詞・動詞・形容詞などの品詞が含まれる。共通語では名詞「ヤマ(山)」、「ガクセー(学生)」、動詞「カク(書く)」、「ミル(見る)」、形容詞「アカイ(赤い)」、「ナイ(無い)」など。

付属語 単独では自立して用いにくい、自立形式に付いて、文中での統語的機能・文法的

¹ ここでの「活用形」は、『活用体系』所収の小柳論(小柳2014)の「動詞活用形の捉え方」の二つのうち、(6)に相当するか、さらに広い。風間(1992)、宮岡(2002)、丹羽・他(2012)の「用言複合体」という概念とほぼ重なるだろう。

意味を示す語。語形変化のない「助詞」と語形変化のある「助動詞」に分けられる。共通語では、「ヤマ(山)ガ」の「ガ」、「ヤマダ。」の「ダ」、「カク(書)ダロー。」の「ダロー」など。

「付属語」は、伝統的な国語学や口語学校文法におけるそれよりも狭く、複数の品詞やテンス(時制)にわたる自立形式に付くことを必要条件とする。例えば、動詞「書く」の否定の形「カカナイ」の「ナイ」は、非自立形式「カカ」に付くため、「付属語」ではなく、語を構成する文法的な形態素「接辞」(この場合、語彙的要素に後接するため「接尾辞」とみなす。一方、推量を表す「カクダロー」「カイトダロー」「カカナイダロー」「アカイダロー」等の「ダロー」は、テンスや肯否において相互に対立する自立形式「カク」「カイト」「カカナイ」に後接し、動詞と形容詞という異なる品詞にわたっても使われる。この「ダロー」は「付属語」である²。また、「カイトイル」「タカクナイ」の「イル」「ナイ」など、動詞「イル」や形容詞「ナイ」の別義の一つとして、語彙的意味が稀薄で、述語句内で文法的意味を表すものがあると認めることになる。

語彙的意味を担う要素の品詞別に述語の種類を列举すると、次のとおりである。

動詞 共通語の「カク(書)」「ミル(見)」など。

形容詞 共通語の「アカイ(赤)」「ナイ(無)」など。

形容名詞述語 共通語の「シズカ(静)ダ」「キレー(綺麗)ダ」など。学校文法における形容動詞の語幹に相当する形式を「形容名詞」とする。

名詞述語 共通語の「ヤマ(山)ダ」「ガクセー(学生)ダ」など。

動詞・形容詞は、どの方言においても、それ自体が語形変化(狭義の活用)をするが、一部の文法的意味を表すために、付属語など別語を付加させる。名詞はそれ自体が語形変化するわけではなく、後接する助動詞(共通語では「ダ」。いわゆる「断定の助動詞」「コピュラ」)が述語としての文法的意味の分化を助ける。ここでは「シズカ」「キレー」も「形容名詞」という品詞の一語とみなし、「シズカダ」「キレーダ」を形容名詞に助動詞が付いた「形容名詞述語」とする。ただし、後述のとおり「形容名詞述語」は、方言によっては形容詞に準ずる活用形を発達させているなど、その品詞上の位置づけが方言によって異なる可能性がある(4.4参照)。

本報告書の「要地方言の活用体系記述」では、原則として、動詞は「書く」「見る」「来る」「する」、形容詞は「見る」、形容名詞述語は「静かだ」、名詞述語は「学生だ」で代表させた。

3. 活用形の種類

各述語の活用形を、次の3つのタイプに大別する。[]内は略称。

終止するタイプ [終止類] それ自体で述語として文を終止する形。

接続するタイプ [接続類] 連体・連用修飾の節・句をつくる形。

派生語をつくるタイプ [派生類] もとの語・述語句に文法的意味を付し、活用する述語句、または、他の品詞に属する語を新たに派生する形。

² ここでの「接辞」と「付属語」の区別は、服部(1960)の「付属形式」(または「接合形式」と「付属語」の区別や、宮岡(2002)の「接辞(affix)」と「倚辞(clitic)」の区別に準ずる。「倚辞(clitic)」は「接語」と訳されることも多い。

「要地方言の活用体系記述」において共通に記述する活用形として、次のものを設定した³。†は動詞のみ、††は動詞以外の形。

終止類

断定非過去形 共通語の「字を書く。」「実が赤い。」「部屋が静かだ。」「私は学生だ。」など。特定の文法的意味を担わない、平叙文・主節述語の無標形。学校文法における動詞等単独の「終止形」に相当。

断定過去形 「字を書いた。」「実が赤かった。」「部屋が静かだった。」「私は学生だった。」など。テンスにおいて過去を表す点で、断定非過去形と対立する形。なお、断定非過去形と断定過去形とを合わせて「**断定形**」とする。

命令形[†] 「手紙を{書け/書きな(よ)}。」など。命令文(聞き手に対して行為を要求する文)で用いる形。①「書け。」「見ろ。」など、学校文法の「命令形」に対応する形のほか、②「書きな(よ)」「見な(よ)。」など、くだけた場面で使われる①以外の形も含める。

禁止形[†] 「汚い字を書くな。」「外を見るな。」など。聞き手に対して行為を禁止する形。上の命令形と行為の要求/禁止という点で対立。命令形の②に対応する形があれば、それも記す。

意志形[†] 「一人で手紙を書こう。」「今からテレビを見よう。」など。話し手の意志を表す形。

推量形 「太郎が手紙を書くだらう。」「今ごろ実が赤いだらう。」「向こうは静かだらう。」「太郎は学生だらう。」など。事態に対する話し手の判断としての推量を表す形。解説では〈推量〉の派生義としての〈**確認要求**〉(「あなたが手紙を書くだらう?」など)に触れる場合がある。

接続類

連体非過去形 「字を書く人」「赤い実」「静かな部屋」「今も学生である友達」など。連体修飾節・句を作る形。

連体過去形 「字を書いた人」「昨日は赤かった実」「静かだった部屋」「去年まで学生だった友達」など。テンスにおいて過去を表す点で、連体非過去形と対立する形。なお、連体非過去形と連体過去形とを合わせて「**連体形**」とする。

中止形 「花子が文を{書き/書いて}、太郎が絵を書いた。」「この紙は{赤く/赤くて}、あの紙は白い。」「この部屋は静かで、あの部屋はうるさい。」「太郎は学生で、花子は会社員だ。」など。当該節の事態と主節の事態とが並列・対比される、または継起的な関係を持つ場合に用いられる形。

仮定形 「今から手紙を書けば、間に合う。」「もし実が赤ければ、採ろう。」「周りが静かなら、眠れる。」「太郎が学生なら、頼めない。」など、当該節で仮定を提示し、主節で帰結を述べる文で主に用いられる形⁴。

派生類

³ 記述すべき活用形、および、代表させる語については、日本語記述文法研究会(2010:128-131)の活用表を参考にした。

⁴ 共通語の「手紙を{書く/書いた}なら、知らせて。」の「~なら」のような、テンスの分化を可能にする形は、仮定に対する帰結を述べる文で主に用いられる形式でない限り、含めない。

- 否定形** 「手紙を書かない。」「実が赤くない。」「部屋が静かじゃない。」「私は学生じゃない。」など。否定を表す点で単純な断定非過去形と対立する形。
- なる形⁺⁺** 「実が赤くなる。」「静かになる。」「学生になる。」など、変化動詞「なる」を付す形。
- 丁寧形** 「私が手紙を書きます。」「もう実は赤いです。」「この部屋は静かです。」「私は学生です。」など。聞き手に対する丁寧な待遇を表す形。
- 使役形⁺** 「花子が太郎に手紙を書かせる。」「花子は毎日太郎にテレビニュースを見させる。」など。ある動作・変化が実現するよう動作主体に働きかける主体を主語にした使役文での形。
- 受身形⁺** 「大事な紙に汚い絵を書かれる。」「転んだところを太郎に見られる。」など。動作による影響の受け手を主語にした受身文での形。
- 可能形⁺** 「難しい漢字を書ける。」「その作品は駅前の映画館で{見られる／見れる}。」など。動作・変化が可能であることを表す形。可能肯定形と可能否定形とで形が違う場合、表では欄を分けて記述。動作を可能(否定形では不可能)にする条件による〈能力可能〉〈状況可能〉等の区別がある場合は、解説する。
- 尊敬形⁺** 「先生が手紙を{書かれる／お書きになる}。」など。主語に対する上位待遇を表す形。
- 継続形⁺** 「太郎が手紙を書いている。」「金魚が死んでいる。」など。動作・変化が進行中であること、あるいは、達成された動作・変化の結果状態が継続して存在していることを表す形。〈進行〉と〈結果継続〉の区別がある場合は、解説本文中に記す。
- 希望形⁺** 「ペンで書きたい。」など。動作の達成を主体自身が希望することを表す形。
- のだ形** 「万年筆ある？先生に手紙を書くんだ(よ)。」「太郎には頼めないよ。まだ学生なんだ。」など。事態を既に定まったこととして述べる形。典型的には別の事態の事情・背景・理由などを述べる場合に用いられる⁵。

ほかに、各方言において特徴的な活用形、および、後述する「基幹」の認定に必要な活用形を、該当する類の欄に追加する。「要方言の活用体系記述」の解説では、派生述語句の活用についても、分かる限り記述している。

共通語における、動詞「書く」「見る」「来る」「する」、および、形容詞「赤い」、形容名詞述語「静かだ」、名詞述語「学生だ」の活用表を、表1に示す。

⁵ 他の活用形が統語的機能と文法的意味に即して規定されるのに対し、「のだ形」は、述語を何らかの手段(準体助詞や連体形)で名詞化し、新たに述語を作るという形態・統語的な条件も含意しており、やや性格が異なる。「のだ形」を活用形の一つに含めたのは、もともとは、名詞述語において共通語やいくつかの方言で「のだ形」に限り連体非過去形に相当する「～ナ」の形が現れるのを確認するためであった。

表 1. 共通語の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
終止類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カキナ	ミロ ミナ	コイ キナ	シロ シナ
	禁止	カクナ	ミルナ	クルナ	スルナ
	意志	カコー	ミヨー	コヨー	シヨー
	推量	カクダロー	ミルダロー	クルダロー	スルダロー
接続類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カキ カイテ	ミ ミテ	キ キテ	シ シテ
	仮定	カケバ カイタラ	ミレバ ミタラ	クレバ キタラ	スレバ シタラ
派生類	否定	カカナイ	ミナイ	コナイ	シナイ
	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカセル	ミサセル	コサセル	サセル
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能	カケル	ミラレル ミレル	コラレル コレル	《デキル》
	尊敬	カカレル オカキニナル	ミラレル 《ゴランニナル》	コラレル 《イラッサル》	サレル 《ナサル》
	継続	カイテイル カイテル	ミテイル ミテル	キテイル キテル	シテイル シテル
	希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクノダ カクンダ	ミルノダ ミルンダ	クルノダ クルンダ	スルノダ スルンダ

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か (だ)	学生 (だ)
終止類	断定非過去	アカイ	シズカダ	学生ダ
	断定過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
	推量	アカイダロー △アカカロー	シズカダロー	学生ダロー
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ	《学生ノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
	中止	アカク アカクテ	シズカデ	学生デ
	仮定	アカケレバ	シズカナラ	学生ナラ
派生類	否定	アカクナイ	シズカデワナイ シズカジャナイ	学生デワナイ 学生ジャナイ
	なる	アカクナル	シズカニナル	学生ニナル
	丁寧	アカイデス	シズカデス	学生デス
	のだ	アカイノダ アカインダ	シズカナノダ シズカナンダ	学校ノノダ 学生ナンダ

《 》 補充形 (異なる語による代替形)
△ 稀な形

4. 活用形の構造

活用形の構造を記述する際は、モーラ（拍）を音韻単位とし、カタカナで表記することを基本とする。

4.1 動詞

4.1.1 「語幹」と「基幹」

モーラ（拍）を音韻単位として活用形の構造を記述するために、「語幹」とは別に「**基幹**」という単位を設ける⁶。

語幹 音素を音韻単位として抽出できる、活用形の不変化部分。共通語の「書く」は{kak}、「見る」は{mi}、「来る」は{k}、「する」は{s}を語幹とする。

基幹 語幹末が子音の場合、基幹＝語幹＋母音。語幹末が母音の場合、基幹＝語幹。おおよそ学校文法の「語幹＋語尾」に相当する。共通語の「書く」の否定形「カカナイ」の「カカ」(kak-a)、断定非過去形「カク」の「カク」(kak-u)、「来る」の断定非過去形「クル」の「ク」(k-u)、「見る」の断定非過去形「ミル」の「ミ」(mi)など。

4.1.2 「活用型」と「類」

動詞の規則的な活用型として、次の名称を用いる。

基幹多段型（略称：**多段型**） 子音語幹・母音変化型。基幹＝子音語幹＋母音。学校文法の四・五段活用にあたる。下の「多段特殊型」と区別する必要がある場合は「**多段一般型**」とする。

多段特殊型 ほぼ多段一般型に準じるが、一部の活用形で異なる型。学校文法のナ行変格活用にあたる場合が多い。

基幹一段型（略称：**一段型**） 母音語幹型。基幹＝語幹。学校文法の上一段・下一段活用にあたる。

基幹二段型（略称：**二段型**） 基幹＝「子音語幹＋母音」で、基幹末母音がイ・ウ、または、エ・ウに限られるもの。学校文法の上二段・下二段活用にあたる。

共通語も含めて多くの方言は、動詞の規則的な活用型として「多段型」「一段型」のみを持つが、一部の方言は「多段特殊型」や「二段型」を持つ。さらに、『活用体系(2)』の「大分県由布市」方言では、基幹二段型に由来し、変化の過程でできた型として「**三段型**」を設け、「沖縄県多良間島方言」では「**一段特殊型**」を設けるなど、その方言の活用体系によって特別な型を設ける。

また、共通語も含めて多くの方言で、「来る」「する」にあたる動詞の活用は、「一段型」に近いが基幹が複数の段にわたる、不規則な型を持つ。

各活用型の所属語彙を示すために、動詞の語彙を「類」に分ける⁷。大きく a、b の 2 類と「来

⁶ 「基幹」は、子音語幹後に「連結母音」等を置く立場と親和性がある（屋名池 1987、清瀬 1989、丹羽 2012 など）。『活用体系』の小柳論（小柳 2014）からも示唆されるように、古典語と現代語の通史的な記述にも有効である。

⁷ 大西（1996）の「活用の類」の概念を引き継ぐもの。ここで、「四（五）段」「上一段動詞」「上二段動詞」など、伝統的な国文法・学校文法における活用の種類の名称を使わないのは、この名称が、活用の形態的特徴と、所属語彙とを、同時に表してしまうためである。つまり、「四（五）段動詞」という名称は、「書か」「書き」…など四（五）種の母音交替が見られることと、「書く」「出す」「立つ」などの動詞群とを同時に意味し、「上一段動詞」という名称は、

る」「する」の2語に分け、a類、b類はさらにそれぞれ3つに下位区分される。以下のとおり。

a類

「書く」類 「出す」「立つ」「飲む」「飛ぶ」など。古典語の四段活用動詞。

「居る」類 「ある」など。古典語のラ行変格活用動詞。

「死ぬ」類 「死ぬ」。古典語のナ行変格活用動詞。

b類

「見る」類 「着る」など。古典語の上一段活用動詞。

「起きる」類 「飽きる」など。古典語の上二段活用動詞。

「開ける」類 「寝る」「受ける」など。古典語の下二段活用動詞。

「来る」 古典語のカ行変格活用動詞。

「する」 古典語のサ行変格活用動詞。

「要地方言の活用体系記述」では、各方言に関して、少なくともa類、b類の各1語と「来る」「する」の活用形を記述する。a類、b類については、原則として、それぞれ「書く」「見る」で代表させるが、依拠する資料やその方言の特徴（それらの動詞が不規則な活用をするなど）により、他の動詞を用いる。a類、b類の下位類は、当該方言で区別がある場合のみ記す。

4.1.3 活用形の構造記述

動詞の活用形の構造を示す際、基幹の末尾母音に応じて「**基幹ア段形**」「**基幹イ段形**」（略して「**ア段形**」「**イ段形**」）のように呼ぶ。共通語も含む本土方言全体において、多段型動詞の断定過去形などで、「カイ-タ」（書いた）、「タツ-タ」（立った）のような語幹末子音や基幹末母音が脱落した形をとる。こうした「カイ」や「タツ」も「基幹」の一つとし、「**基幹音便形**」（略して「**音便形**」）と呼ぶ。表2に共通語の活用形の構造の記述例を、表3に共通語における多段型動詞の基幹音便形の作り方を示す。

「要地方言の活用体系記述」では、各方言の動詞の活用を表1、表3の形で示し、本文中では、各活用形の構造を、「基幹」にどのような後続形式（接辞や付属語、補助用言）が続くかという述べ方で記述する。例えば、次のような述べ方となる。

断定非過去形は、多段型動詞では基幹ウ段形、一段型動詞では基幹（=語幹）に接辞「ル」を付した形、「来る」「する」では基幹ウ段形に接辞「ル」を付した形となる。

原則としてカナ表記を用い、必要に応じて音素表記を併記する。「派生類」に関しては、派生した述語形式における語幹・基幹の境界標示を省略するが多い。例えば「カカナイ」kak-a-na-iを、kak·a-naiと記すような場合である。

母音交替が見られず「ミ（見）」などイ段に固定されることと、「見る」「着る」などの動詞群とを同時に意味する。中央語史においては、古典語から現代共通語まで、この両義性があまり問題にならないが、母音変化を経た琉球諸方言（琉球諸語）では、動詞活用における母音交替のありかたと語彙類とが一致しない。また、本土方言においても、現代共通語の「五段活用動詞」にあたる語彙において、必ずしも母音五段が揃わない場合や、「一段活用動詞」にあたる語彙において母音がイ段に限らない場合がある。

表 2. 共通語における動詞活用形の構造

語例	活用型 {語幹}	基幹	活用形の記述例
書く	多段型 {kak}	kak-a, i, u, e, o (ア・イ・ウ・エ・オ段形) kai (音便形)	断定非過去 kak-u (ウ段) 意志 kak-o-R (オ段長音) 推量 kak-u=daroR (ウ段(断定非過去)=ダロー) 過去 kai-ta (音便-タ) 否定 kak-a-nai (ア段-ナイ) 可能 kak-e-ru (エ段-ル)
見る	一段型 {mi}	mi (イ段形)	断定非過去 mi-ru (基幹-ル) 命令 mi-ro (基幹-ロ) 否定 mi-nai (基幹-ナイ)
来る	不規則 {k}	k-i, u, o (イ・ウ・オ段形)	断定非過去 k-u-ru (ウ段-ル) 過去 k-i-ta (イ段-タ) 否定 k-o-nai (オ段-ナイ)
する	不規則 {s}	s-a, i, u (ア・イ・ウ段形)	断定非過去 s-u-ru (ウ段-ル) 過去 s-i-ta (イ段-タ) 受身 s-a-reru (ア段-レル)

- ・ 語幹末子音と母音の境界
- 接辞の境界
- = 語の境界

表 3. 共通語における多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak-u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik-uはkをQ(促音)にし「イツ-タ」。
g	嗅ぐ kag-u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das-u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac-u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin-u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob-u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom-u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir-u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
w/∅	買う ka(w)-u	カッ-タ	wをQ(促音)にする。

その方言の母音体系、モーラ・音節体系によって、可能な基幹は異なる。東北方言では、サ・ザ・タ行のイ・ウ段、つまり「シ/ス」「ジ/ズ」「チ/ツ」がそれぞれが音韻的に対立しない。『活用体系(2)』の「山形県山形市方言」や本報告書の「宮城県仙台市方言」では、「する」の基幹イ・ウ段が統合してウ段になっている⁸。また、本報告書の「福島県福島市方言」では、「する」

⁸ 『活用体系』の「岩手県盛岡市方言」と「秋田県由利本荘市本荘方言」では、「する」の語幹{s}において基幹イ・ウ段が統合した「イウ段」をたてた。

の基幹イ・ウ段が統合してイ段になるとともに、活用型も一段型に統合している。

また、『活用体系 (2)』の「沖縄県多良間方言」では、その母音体系に則り、多段型動詞の基幹がア段・イ段・イ° (i) 段、一段型動詞の基幹がイ段、「来る」の基幹がイ段「キ」、ウ段「ク」、イ° 段「キス」、「する」は語幹が{s}, {sj}の2つあり、前者のイ段「シ」、ウ段「ス」、後者のウ段「シュ」がある⁹。

いくつかの方言では、一段型において、命令形 mi-re (ミ-レ)、否定形 mi-raN (ミ-ラン)、など、r で始まる接辞が付き、多段型 r 語幹動詞（「切る」における kir-o (キロ)、kir-a-N (キラ-ン) など）と平行的な活用形を発達させている。いわゆる「ラ行五段化」と呼ばれる変化であり、本報告書では「r 語幹化」と呼んでいる。「要地方言の活用体系記述」においてはその発達具合について言及することがある。

4.2 形容詞

形容詞についても動詞と同様に、活用形の不変化部分を「語幹」とする。共通語の「赤い」では「アカ」{aka}が語幹となる。基本的にどの方言も形容詞の語幹末は母音なので、形容詞の活用形の構造については、「語幹」にどのような形式が続くかを記し、「基幹」の用語を用いない。

多くの方言で形容詞の活用型は1つだが、いくつかの方言では、断定非過去形が2拍の語において不規則性が観察される。また、西日本の多くの方言では、中止形・否定形・なる形など、学校文法の「連用形」に由来する形で、「アコナイ」「アコーナイ」など、語幹末母音が変化した形が現れる。この変化した形（「アコナイ」「アコーナイ」では「アコ」）を「交替語幹」と呼ぶ。「要地方言の活用体系記述」では、こうした活用の不規則性や、交替語幹の種類・出現環境について、各活用形の構造記述に先立って記述する。

形容詞の活用形の構造は、語幹（または交替語幹）にどのような形式（接尾辞、付属語など）が続くかで記述できる。形容詞の活用形の一部として、「アカカッタ」「アカカロー」など、動詞の多段型 r 語幹動詞に準じた、「語幹-ク=存在動詞アリ」に由来する形が用いられる（いわゆる「カリ活用」）。また、『活用体系』所収の「沖縄県那覇市首里方言」や『活用体系 (2)』所収の「沖縄県多良間島方言」では、「語幹-サ=存在動詞アリ」に由来する形が用いられる（いわゆる「サアリ活用」）。これらの活用・活用形を「動詞的な活用（形）」、それらを構成する「カッ」「カロ」などを「動詞的な接辞」と呼ぶことがある¹⁰。

共通語の形容詞「赤い」の活用形の構造の記述例を下に示す。

断定非過去形	アカイ	aka-i (語幹-イ)
断定過去形	アカカッタ	aka-kaQ-ta (語幹-カッ-タ)
否定形	アカクナイ	aka-ku=nai (語幹-ク=ナイ)

「要地方言の活用体系記述」の本文では、例えば次のような述べ方となる。

断定過去形は、語幹に動詞的な接辞「カッ」、さらに「タ」を付す。

否定形は、語幹に接辞「ク」、さらに補助形容詞「ナイ」を付して作る。

⁹ 琉球の方言として『活用体系』に「沖縄県首里方言」と「沖縄県宮古島市平良下里方言」の記述を掲載している。

¹⁰ 『活用体系』では、形容詞の各活用形を、「非動詞的な活用型」「動詞的な活用型」いずれかをとるものとして記述していたが、ここでの「動詞的（な）活用」はその後者にあたるものである。本報告書の「鹿児島県鹿児島市方言」や『活用体系』の「福岡県福岡市方言」など、方言によっては、形容詞の活用形全体において「動詞的（な）活用」の形が占める割合が高い。

『活用体系』所収の「秋田県由利本荘市本荘方言」など、東北方言の多くでは、語幹そのままの形が断定非過去形・連体非過去形として用いられる。下は本荘方言の例。

断定非過去形	アケァ	akɛ	(語幹)
断定過去形	アケァカッタ	akɛ -kaQ-ta	(語幹-カッ-タ)
中止形	アケァクテ	akɛ -ku-te	(語幹-ク-テ)

4.3 名詞述語

「要地方言の活用体系記述」では、形容名詞述語と名詞述語とをまとめて記述するが、ここでは先に名詞述語について述べる。

名詞述語は、どの方言も名詞に付属語（「コピュラ」「断定の助動詞」などと呼ばれる語）が後接して、述語句としての文法的意味を表す。この付属語は、形容詞と同じく、一部の活用形において、多段型 r 語幹動詞に準じた形をとる。「で=あり・ある」に由来し、語幹{dar}（方言によっては{de=ar}{zjar}{jar}）とみなせる形と、「に=あり」「なり」に由来し、語幹{nar}とみなせる形が、一つの方言内に併存することが多い。ただし、多くの方言で断定非過去形は「～ダ・ジャ・ヤ」、「のだ」に続く形は「～ナ」のように、末尾のルを脱落させた形をとり、「～ダル」「～ナル」などのウ段形は用いられない。

共通語「学生だ」の活用形の構造記述例を示す。

断定非過去	ガクセーダ	gakuseR=da	(名詞=ダ)
断定過去	ガクセーダッタ	gakuseR=daQ-ta	(名詞=ダッ-タ)
中止	ガクセーデ	gakuseR=de	(名詞=デ)
仮定	ガクセーナラ	gakuseR=nara	(名詞=ナラ)

「要地方言の活用体系記述」の本文では次のような述べ方となる。

断定過去形は、名詞に動詞的な接辞「ダッ」、さらに「タ」を付す。

中止形は、名詞に「デ」を付す。

『活用体系(2)』の「沖縄県多良間島方言」では、断定非過去形に「コピュラ」にあたる付属語は伴わず、名詞単独となり、終助詞が名詞に直接付く。また、「コピュラ」として用いられるのは、存在動詞「あり・ある」に由来する形である。例を示す。

断定非過去	ガクセー	gakuseR	(名詞)
仮定	ガクセーアラバ	gakuseR=ar-a-ba	(名詞=アラ-バ)

4.4 形容名詞述語

形容名詞述語は、共通語ではほぼ名詞述語に準じた活用をするが、西日本方言においては形容詞に準じるなど、方言差がある。これまでの2冊の報告書や本報告書で対象とした方言や先行研

究を見る限り、少なくとも次のタイプが見いだせる¹¹。名詞述語型以外のタイプを持つ場合、名詞述語型も併存するのが一般的である。

名詞述語型 形容名詞が、名詞述語における名詞に準じる。

形容詞型 形容名詞が、形容詞語幹に準じる。

ナ付加・名詞述語型 「形容名詞=ナ」形が、名詞述語における名詞に準じる。

ナ付加・形容詞型 「形容名詞=ナ」形が、形容詞語幹に準じる。

共通語「静かだ」の活用形の構造記述例を示す。上の「名詞述語型」にあたる。

断定非過去	シズカダ	sizuka=da (形容名詞=ダ)
断定過去	シズカダッタ	sizuka=daQ-ta (形容名詞=ダッ-タ)
連体非過去	シズカナ	sizuka=na (形容名詞=ナ)
中止	シズカデ	sizuka=de (形容名詞=デ)
仮定	シズカナラ	sizuka=nara (形容名詞=ナラ)

『活用体系』の「福岡県福岡市方言」や『活用体系(2)』の「鹿児島県甑島里方言」では、「名詞述語型」と「形容詞型」が併存している。形容詞型をとりやすいかどうかは語によって異なるようである。「鹿児島県甑島里方言」の例を示す。

断定非過去	シズカカ	sizuka-ka (形容詞型：形容名詞-カ)
	シズカヤイ	sizuka=jai (名詞述語型：形容名詞=ヤイ)
断定過去	シズカカッタ	sizuka-kaQ-ta (形容詞型：形容名詞-カッ-タ)
	シズカヤッタ	sizuka=jaQ-ta (名詞述語型：形容名詞=ヤッ-タ)
否定	シズコーナカ	sizukoR=na-ka (形容詞型：形容名詞の交替語幹長音形=ナ-カ)
	シズカジャ (一) ナカ	sizuka=zja(R)=na-ka (名詞述語型：形容名詞=ジャ (一) =ナ-カ)
	シズカヤナカ	sizuka=ja=na-ka (名詞述語型：形容名詞=ヤ=ナ-カ)

『活用体系』の「山口県東周防方言」では「名詞述語型」と「ナ付加・名詞述語型」が併存している。

断定非過去	シズカ (ジャ)	sizuka(=zja) (名詞述語型：形容名詞 (=ジャ))
	シズカナ (ジャ)	sizuka=na(=zja) (ナ付加・名詞述語型：形容名詞=ナ (=ジャ))
推量	シズカジャロー	sizuka=zjar-oR (名詞述語型：形容名詞=ジャロー)
	シズカナジャロー	sizuka=na=zjar-oR (ナ付加・名詞述語型：形容名詞=ナ=ジャロー)

『活用体系(2)』の「岡山県岡山市方言」「広島県三次市方言」「高知県宿毛市方言」では、「名詞述語型」と「ナ付加・形容詞型」が併存している。さらに本報告書の「愛媛県松山市方言」で

¹¹ 先行研究として大西 (1997) など。

は、「名詞述語型」と「ナ付加・名詞述語型」「ナ付加・形容詞型」が併存している。下は「広島県三次市方言」の例である。断定非過去形には「ナ付加・形容詞型」にあたる形がなく、連体非過去形と同形の「ナ」が付加した形がある。推量形には、両型のほか、「に=あり」「なり」に由来する「ナロー」が付加した形も用いられる。

断定非過去	シズカ (ジャ)	sizuka(=zja) (名詞述語型：形容名詞 (=ジャ))
	シズカナ	sizuka=na (形容名詞=ナ)
断定過去	シズカジャッタ	sizuka=zjaQ-ta (名詞述語型：形容名詞=ジャッ-タ)
	シズカナカッタ	sizuka=na=kaQ-ta (ナ付加・形容詞型：形容名詞=ナ=カッ-タ)
推量	シズカジャロー	sizuka=zjar-oR (名詞述語型：形容名詞=ジャロー)
	シズカナジャロー	sizuka=na=kar-oR (ナ付加・名詞述語型：形容名詞=ナ=カロー)
	シズカナロー	sizuka=nar-oR (形容名詞=ナロー)

参考文献

- 大西拓一郎 (1996) 「活用の類と統合—全国方言の活用の通時的対応のモデル—」言語学林 1995-1996 編集委員会 (編) 『言語学林 1995-1996』三省堂
- 大西拓一郎 (1997) 「活用の整合化—方言における形容詞の「無活用」化、形容動詞のダナ活用の交替などをめぐる問題」加藤正信編 『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾辞型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」宮岡伯人編 『北の言語 類型と歴史』三省堂
- 清瀬義三郎則府 (1989) 『日本語文法新論—派生文法序説』桜楓社
- 小柳智一 (2014) 「中央語における動詞活用の歴史」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典資料集 (2) 活用体系』(科学研究費研究成果報告書)
- 日本語記述文法研究会 (2010) 『現代日本語文法 1 第1部総論 第2部形態論』くろしお出版
- 丹羽一彌・黒木邦彦・田村建一・品川大輔 (2012) 『日本語はどのような膠着語か—用言複合体の研究』笠間書院
- 丹羽一彌 (2012) 「日本語の連辞的語構成」丹羽・他 (2012) 所収
- 服部四郎 (1960) 「付属語と付属形式」『言語学の方法』岩波書店
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とは何か エスキモー語から日本語を見る』三省堂
- 屋名池 誠 (1987) 「活用—現代東京方言述部の形態=構文論的記述 [2] —」『学苑』565号